

ユニット型特別養護老人ホームにおけるインカム導入の効果

学生会員 中川 京香

ユニット型特養 介護負担軽減 インカム
介護職員間の連携

1. 研究背景・目的

我が国では平均寿命の伸びや出生率の低下により少子高齢化が急速に進行しており、人口問題研究所の発表によると2065年には38.4%、すなわち2.6人に1人が労働力人口になるとされている。こうした状況の中で、介護者不足は深刻さを増していくが、高齢者のQOLを確保しながら介護者の直接的・間接的負担やストレスの軽減を図ることが課題である。介護ロボットや介護機器により介護者の負担軽減を図ろうとする取り組みが行われている一方、介護職員間の連携を促進する機器についてはほとんど研究が行われてこなかった。そこで、操作習熟の容易さや導入コストを踏まえ現段階で導入可能な技術としてインカムに着目し、その導入により介護職員間の連携を促進し負担やストレスを軽減するとともに、高齢者のQOLやケアの安全性の向上にも繋げることを本研究の目的とする。

2. 研究概要

2-1. 調査対象施設

個室ユニット型特別養護老人ホーム 本館

- ・1階にデイサービス、2～4階に特養（各階3ユニットからなる）、5階にショートステイの施設を備える。
- ・2017年4月17日より2～4階の特養にのみインカム（デジタル簡易無線登録局 STANDARD VXD1）を導入。

2-2. 調査方法と調査日程

調査Ⅰ：ライフコーダを用いたインカム調査期間の職員の歩数測定調査

インカム導入前後の変化を調べるにあたり、まずはインカム導入前の実態を把握することを目的とし、介護職員の1分間の歩数を測定した。

調査Ⅱ：インカムを通じた会話内容と介護職員の動きに関する実態調査

実際にインカムを使用する場面や目的を知り、インカム導入の影響および効果について把握することを目的とし、対象施設に滞在しインカムでの会話内容と職員の動きを記録した。

調査Ⅲ：介護職員に対するアンケート調査

インカム導入による影響について、介護職員の方々がどのように感じているかを把握することを目的とし、アンケート調査を行った。

調査Ⅰ：2017年3月20日(月)～4月3日(月)

調査Ⅱ：2017年12月19日(火)～21日(木)各8:30～16:30

調査Ⅲ：2017年10月16日(月)～11月6日(月)

3. 調査結果

調査Ⅰに関して、シフト別では、早出や遅出の職員に対し、夜勤の職員の歩数が多かった。これは早出や遅出の時間帯は各ユニットに1人以上の職員が配置されているのに対し、夜勤の時間帯は3ユニットに2人の職員しか配置されておらず、1人の歩数が多くなるからである。また、寝ている入居者に対し排泄支援を行う場合などは2人がかりで行う必要があるため、そのことも夜勤の時間帯に歩数を増やす要因となっていると考えられる。フロア別では、2階の方が4階より歩数が多かった。2階の入居者が31人であるのに対し、4階の入居者は29人と2人少ないことが歩数の差に影響している最も大きな要因であると考えられる。時間帯による歩数の差の違いについては、午前中はフロアに応じてパートの職員の人数を調整することで対応可能なため歩数の差が少なくなる。業務内容と照らし合わせると食事やおやつの時間帯は比較的差が少なく、個別対応や入床支援、深夜に排泄支援や安否確認を行う時間帯に差が大きくなる。この結果からも、やはり入居者の人数の差が歩数の差に繋がっていることがわかる。

調査Ⅱに関して（Fig1,2参照）、8時間の調査時間中に平均50.7回インカムが使用されていた。インカムの使用が多かったのは10:00～13:59で、全体の72.4%を占めていた。これは入浴介助が行われる時間帯であり、使用していた場面は入浴予定調整と入浴介助時が46.4%であった。また、12:00～12:29にインカムの使用が著しく多くなっているが、これはこの時間帯に遅出勤務の職員が出勤するため、出勤の挨拶にインカムが使用されるからであり、41.7%がこの用途での使用であった。

インカムを使って連絡を取る相手は同じフロアの別ユニットの介護職員が77.0%、看護師が19.7%であり、別のフロアや事務所とはインカムではほとんど連絡を取っていなかった。インカムの使用場面では、入浴介助時(25.7%)、出勤・退勤・休憩の挨拶の時(18.4%)、トイレ・排泄介助時(16.4%)、入浴予定調整時(14.5%)が多かった。インカムの使用目的では、介護職員の呼び出し(28.9%)、挨拶(18.4%)、仕事の依頼、指示、調整(15.8%)、利用者の質問、確認(12.5%)、看護師の呼び出し(9.9%)が多かった。

全体としては1分間の歩数の平均値に有意差はなかったが、時間帯ごとでは歩数が有意に増えている時間帯と減っている時間帯があることが明らかになった。具体的には、インカムの使用が多かった10:30～13:29は介護職員の歩数が増え、インカムの使用が少なかった8:30～9:29と14:00～15:59は介護職員の歩数が減っていた。インカムの導入により、インカム導入前よりも異なるユニットに

勤務する職員同士の助け合いが増え、人手が足りないところを足りているところで補えるようになった結果である。導入前は他のユニットの状況が把握できず、ヘルプを呼ぶのをためうことも多かったが、インカムにより同じフロアの全職員と同時に連絡が取れるようになり、その時手の空いている職員がヘルプに駆けつけられるため、ヘルプを求める側も気軽に呼べるようになり、介護職員間の連携が促進されたと言える。

調査Ⅲに関して、インカムを使用する場面では「ユニット内で1人で勤務する時間帯(88.5%)」、「入浴介助の際(88.5%)」、「アクシデントが発生した際(80.8%)」、「トイレ・排泄介助の際(76.9%)」の4つが特に多かった。その場から離れることができなかつたり、2人支援が必要な際にヘルプを呼んだりすることが多い時間帯や、その場ですぐに他と連絡を取る必要があつたり、他の職員にヘルプを求めたりすることが多い場面でのインカムの使用が多く、インカムがうまく活用されていると言える。

インカムを使用する目的では「看護師の呼び出し(88.5%)」、「介護職員の呼び出し(76.9%)」、「仕事の依頼、指示、確認、調整(76.9%)」、「利用者についての質問、確認(61.5%)」、「利用者についての報告、共有(61.5%)」の5つが多かった。「看護師の呼び出し」については、看護師の診察が必要な際にインカムを使用すればすぐに呼ぶことができ、手間が省けるとともに、利用者や介護職員の待ち時間を減らすこともできる。「介護職員の呼び出し」が多いのはインカムの導入により以前よりもヘルプを求めやすくなり、職員間の連携が増加している結果である。その他の3つは呼び出しとは反対にインカム上で会話を完結させることができるため、介護職員の無駄な移動を減らすとともに、ちょっとした質問や、利用者や各ユニットの状況を逐一報告・共有することで自分の勤務している以外のユニットの状況も把握できるようになった。

インカムによる効果に関して、2階と4階では2階の方がインカムによるプラスの効果が大きい傾向があり、使用回数も2階の方が多かった。インカムをたくさん使用すればそれだけ得られる効果も大きいと言え、得られる効果が大きければよりインカムの使用回数が増えることが予想される。そうすればさらに得られる効果も大きくなっ

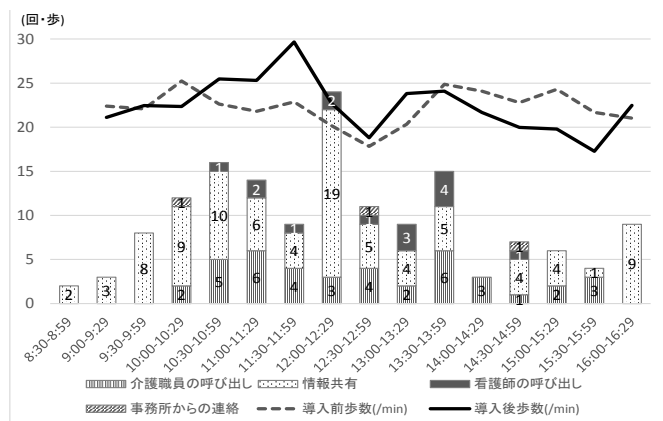


Fig. 1 インカム使用回数とインカム導入前後の職員の歩数の関係

ていくことが期待できる。また、インカムの使用により職員同士のコミュニケーションが増えたことで、得られる情報の量が増えただけでなく、その情報の質も向上していることは注目すべき点である。それに伴いチームケアの充実度は明らかに向上しており、仕事の満足度に関しても多少なりとも増えてはいるので、インカムによって改善されている部分は確かにあると言える。しかし、マイナスの効果を感じている職員もいることから、インカムの不具合や重量などによる身体的負担、その他精神的負担などを含め今後解決すべき課題もあり、まずはインカムの性能を向上させることがその課題の解決に繋がるであろう。

4. 結論

調査Ⅱの結果、介護職員の歩数は減った時間帯と増えた時間帯があり、全体としてはほとんど変化が無かった。しかし、調査Ⅲのアンケート結果では、業務時の移動距離について、過半数の介護職員が「減った」と回答していた。数値的には歩数はほとんど変わらないばかりか、少し増加させているにも関わらず、職員自身は減少したと感じているのは、導入前は他の職員に用がある際に直接行かなければならなかつたり、わざわざ行ったのにその職員が不在あるいは手が離せない状況等で結局目的が果たせないまま戻ることになったり、といったことがあつたが、インカム導入によりそういった「無駄な移動」が無くなったからである。また、「無駄な移動」が無くなったことで職員のストレスも軽減されたと考えられる。ヘルプに呼ばれることは介護職員にとって負担になっているということではなく、むしろそれによって入居者の笑顔に喜びを感じたり、仕事にやりがいや楽しさを感じる職員もいる。さらに、逆の立場からいつでもほぼ確実に他の介護職員や看護師と連絡を取ることができ、必要であればヘルプを求めることができるという安心感も大きい。気軽にヘルプを呼べるようになったことでインカム導入前は多少の無理をしてでも1人で行っていたことを2人支援でできるようになることが増えたが、その分歩数が増加していることを考えると身体的負担については減ったのかどうかは明らかではない。しかし、精神的負担については減っていると言える。今後、インカムを改良し、使用拡大していくことが課題である。

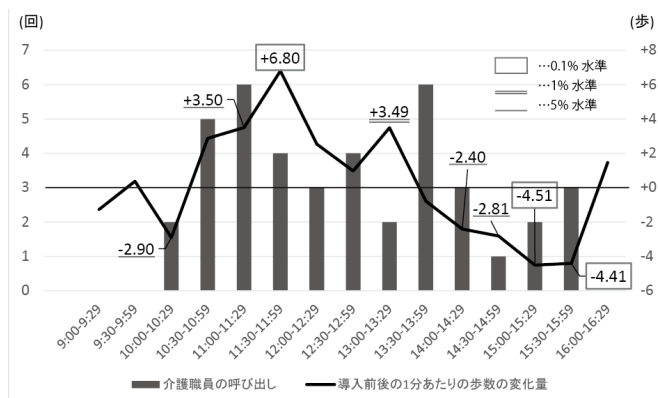


Fig. 2 歩数の平均値の有意差が認められた時間帯